



七百号発行にあたり

令和七年十一月号の本号をもつて小田原俳句協会報は七百号を迎える。昭和四十一年六月創刊以来五十八年間毎月欠けることなくめでたく本号に到達いたしました。

〈七百号記念号〉

七百号発行をお祝いします

この度は小田原俳句協会報七百号の発行、誠におめでとうございます。日常の暮らしで感じる情景、季節などを俳句で表現し続ける皆さまの文化活動に、心から敬意を表します。文化は人々に生きる喜びをもたらすとともに、私たちが困難な時代を乗り越えていくための大きな支えとなります。

多様な文化が息づく小田原において、今後ともご活躍いただくとともに、引き続き本市の文化振興にご協力賜りますようお願い申し上げます。

この間編集発行に携わってこられた方々、毎月の原稿提供に協力いただいた会員の皆さま並びに印刷のエーアンドエヌ社様に心からの感謝と敬意を表します。協会報という毎月の情報ツールによつて、俳句作品の相互研鑽がなされ、俳句大会の実施や合同句集刊行等につながつたのではないでしようか。

当協会は会員の高齢化、会員数の減少などさまざま課題がありますが、今後も会員の皆さまを少しでも支援出来るよう協会報発行を継続していくればと思料致します。

会員の皆様のご理解ご協力をお願い申し上げます。

令和七年十一月

小田原市長 加藤 憲一

小田原俳句協会会長 村場 十五

令和七年十一月

理事会だより（10・9）

一、秋季俳句大会第二部当日の進行につき長谷川・佐々木両副会長より説明あり確認した。来賓、外部選者特選賞の選者に合同句集を献呈することに。なお理事会後事業部、総務部で細部を打合せした。

二、秋の吟行会の参加見込みは二十四名。（総務部）
三、梅まつり俳句大会の募集案内を配布。（協会外へ
98通）（事業部 米山理事）

なお兼題の梅につき「観梅」の取扱い如何にと小野理事から問題提起があり意見交換の結果、「梅」は本来植物を想定しており「生活」範疇の「観梅」は除外されるがその旨募集時明示していないので入賞判定時に必要な場合審査会にて判断することになった。
(会長、長谷川副会長)

理事会日程

11／13、12／11、1／8、
(毎月第2木曜日 けやき15時より)

池田忠山 抄出

しばらくは耳に残りし蟬しぐれ
暑き日やもの言ひたげな埴輪の目
片蔭のとぎれて長き家路かな
油絵の原爆ドーム晩夏光
あをあをと山河連なる夏料理
海開きとんびも待つてゐるやうな
百日の幸たくはへてさるすべり
山伏の矢の放たれて滝開き
星祭ウッドデッキに椅子二つ
熊蟬がにいにい蟬となる目覚め

大石雄介 抄出

段ボールの「上積み厳禁」雲の峰
草引くや我に被さる雲の影
独り身の枕の下を天の川
水銀は個体？液体？芋の露
いい風がなかなか来ない冷奴
四捨五入コロツケメンチトマトかな
異国語のとびかう工事現場立秋
夏の果てテトラポットの白じらし
履く人のなき白靴の土踏まず
熊蟬がにいにい蟬となる目覚め

門松	鳳文	須田	純子
小澤	紀子	高杉堀三朗	
伊藤はる子		植松テル子	
竇子山京子		加藤 健治	
松岡美和子		杉崎 せつ	
佃 悅夫			
佐々木重満			
小澤 園子			
瀬戸 正洋			
杉山あけみ			
山本 すみ			
須田 聰子			
杉崎 せつ			

令和7年度小田原秋季俳句大会

協会報が11月号で七百号となることを記念して「小田原俳句協会報七百号記念大会」として企画。事前投句の兼題「秋の空、木犀」に対し二百十五名七百六十二句とかつてない投句があり、十月十一日当日の部に七十名の参加を得ておだわら市民交流センターに於て開催。

今大会は近隣俳句協会代表者にも選者特選をお願いした他入賞者数を拡大し、賞品にも工夫を凝らした。後援の小田原市からは加藤市長、井上市議会議長を来賓としてお迎えし祝辞をいただいた。

兼題入賞作品

小田原市長賞

母あらばこその帰郷や金木犀

小田原市議会議長賞

木犀へ母リハビリの歩を伸ばす

小田原俳句協会会长賞

木犀や机小さき写経の間

以下俳句協会賞（三十位まで）

女子寮の朝は賑やか金木犀

スタートのピストル向ける秋の空

秋天へゆつくり伸びす象の鼻

協会報が11月号で七百号となることを記念して「小田原俳句協会報七百号記念大会」として企画。事前投句の兼題「秋の空、木犀」に対し二百十五名七百六十二句とかつてない投句があり、十月十一日当日の部に七十名の参加を得ておだわら市民交流センターに於て開催。

銀木犀忌明けの人のショートヘア
人の世の小さきことよ秋の空

一人降り一人乗る駅金木犀
秋天に切り込んでゆくブーメラン

金木犀子ども食堂満席に
銀木犀甘えたき日の小さき嘘

高層エレベーター「秋天まで参ります」
縦走の尾根くつきりと秋の空

抱き上げし嬰は秋天を握りしむ
散り敷いて掃くをためらう金木犀

木犀の一枝を胸に柩閉づ
木犀や錦飾らぬままに老ゆ

行進の美しき歩幅や秋の空
木犀や旧家の門は閉じたまま

おしやべりな風が風押す今木犀
樹木葬選びし母よ秋の空

秋天へ少し近づく肩車
秋天へ田の神返す笛太鼓

ままとこの山盛りごはん銀木犀
くりかえす背面跳や秋の空

木犀や笑ひて済ます物忘れ
秋天や組体操の震へ立つ

菅野 英余
北村 純一
日高 朝代

清水 吞舟
杉本 久子

関根 洋子
大山 道子

伊藤 梢
山田 凍崖

村場 十五
大島美恵子

吉岡 孝三
中根登美子

小畠 秀樹
岡本 保

守屋 まち
伊藤あつ子

内田知江子
小林 環

伊藤あつ子
守屋 まち

木犀や三寸開ける厨窓	田中 幸子	(小田原俳句協会名譽会長) 佃 悅夫特選
廃校や大樹になりし金木犀	菅野 英余	金木犀ゴッドファーザーの背中
母あらばこそその帰郷や金木犀	駒場 京子	(小田原俳句協会顧問) 大石雄介特選
木犀をちりばめ夜の満ちてゆく	芳賀 陽子	体ごと持ち上げられる秋の空
(厚木市俳句協会会长)	川島浩平特選	(小田原俳句協会会长) 村場十五特選
秋空や馬の背にゐて草千里	村場 十五	横目にも見優る里の金木犀
(茅ヶ崎俳句連盟会長)	清水呑舟特選	（春野俳句会代表） 長谷川きよ志特選
秋天へ心の句帳ひらきけり	菅沼とき子特選	スターのピストル向ける秋の空
(相模原俳句連盟会長)	中村 昌男	肥後ちさこ
よくとほる少年の声秋の空	山本 すみ	(零俳句会代表) 岡本史郎特選
(秦野市俳句協会会长)	竹村半掃特選	秋の空棚田に鎌の光りけり
木犀のこぼれて水面みじろがず	山本 すみ	(みなみ俳句協会代表) 加藤かほる特選
(神奈川県現代俳句協会会长)	芳賀陽子特選	木犀の香の中ひと日書に耽ける
木犀の一枚を胸に柩閉づ	山田 凍崖	当日題入賞作品 (席題「秋季雑詠」)
(中井俳句協会会长)	長谷川昭放特選	小田原俳句協会会长賞
木犀や越したる隣家いま如何に	中村 玉水	長き夜のどこにつけよう句読点
*	*	(以下二十位まで)
木犀のこぼれて水面みじろがず	杉本 久子	この地 <small>ほし</small> 球の異変見えるかトンボの眼
(横須賀俳句協会会长)	芳賀久雄特選	加藤かほる
木犀の一枚を胸に柩閉づ	山田 凍崖	石黒 和風
(中井俳句協会会长)	長谷川昭放特選	関戸わよこ
木犀や越したる隣家いま如何に	中村 玉水	外山 遊児
*	*	渡辺 治美
*	*	瀬戸 悠

新米やいろはのいから農学び

鰯雲君の見てる空を見る

南無阿弥陀仏自然薯そつと引く

これ以上太ることなき秋の空

尊徳の松の百態鳥渡る

ポン菓子は昭和の遺産鰯雲

栗拾う縄文人の貌をして

嫁菜菊野にあるやうに活けもして

七百号の記念誌待たる秋日和

平服でお越しください菊膾

戦場を眼に焼きつけて雁渡る

氣分屋のエンジン騙し稻を刈る

灯火親し言の葉つまるインク壺

片野
百武
田畠
若村
川本
北村
長谷川
中村
近藤
中村
芳賀
吉岡
岡本

足立和子

尚美
ヒロ子
育子
文江
昭放
玉水
久江
みどり
陽子
孝三
保

涼しさや文様のなき土師・須恵器

池田忠山

片野
百武
田畠
若村
川本
北村
長谷川
中村
近藤
中村
芳賀
吉岡
岡本

涼しさや文様のなき土師・須恵器

日本独特の土器の一種で軟らかい茶褐色した土器で

古墳時代の始め頃まで野焼きのような方法で作られ

日本独特の土器の一種で軟らかい茶褐色した土器で

古墳時代の中頃に朝鮮半島から伝

わった高温の窯で焼く硬い青灰色をした土器の事。

文様のない器に涼しさを感じている贅沢な幸せ感が

良い。この暑い日々の最高の贈物。こんな想いを起

こさせてくれるこの句に共感させられた。

松下俊之

寂しさの残る線香花火かな

尾崎一夫

夏休みの思い出のひとつに花火があります。揚花火や仕掛け花火は勿論、庭での手花火にも忘れない思い出があります。待ちに待った花火セットを開けると派手な花火を取り合って、次々に子どもが興じます。気がつくと線香花火だけが残っています。「もう終わりなの、次はいつかな」と言いながら始めます。名残惜しむ線香花火には無口にさせる力があります。子どもの熱狂と寂しさが感じられます。

二〇二六年 俳人協会カレンダー

五月

学食の薄きハムカツ若葉風

六月

城壁の翳りて椎の花匂ふ

瀬戸 齋藤 悠 桂

俳句おだわら鑑賞（令和7年9月号）

七百号特別企画 「わたしの一句」

秒針の音の支配の霜夜かな

石井きよよ子

秒針の音だけが聞える更けゆく夜に身を委ね。

富士よりの湧水の池浮寝鳥

青木 勝子

富士方面の湧水池に夕日を受け数羽が浮いていた。

聖夜なり研究室のマグカップ

青山 孝子

非日常の聖夜と変らぬ日常の研究室との対比。

主観的見解の相違亀の鳴く

青木たけを

真実らしき嘘の羅列。明解かつ余韻の残る詩に。

傷だらけのアルマイド鍋昭和の日

青山 典仁

母が愛用したアルマイド鍋が今は無人の実家に。

梶の森は大きな恵袋

足立 和子

自然に習い、自然の智を授かる。此處に生まれた句。

百の段登りて百の落椿

新井たか志

名刹を訪れた折り、石段と椿の景に心打たれる。

奉納の童の舞や花の雨

荒井ちゑ子

さくらの散る頃、神社前で見た景色です。

鰯雲涅槃釈迦牟尼阿蘇五岳

池田 忠山

季節の変わり目温もりを求めて雜踏へ。

伊藤 道郎

十三夜シニヨン解きて身の緩ぶ

岩楯惠津子

稽古帰りのバレリーナの卵達を見て浮かんだ句。

土塊を起こす一鍬春動く

石井千代子

鍬でうなうたびに小さな草の芽が動き春を感じました。

新米にご飯の供は不要なり

石井 秀稀

新米を初めて食べたときの感想。

卒業や雀荘横の純喫茶

石川 州洋

昭和時代の学生街の風景を懐かしんで詠んだ。

縁側に一升瓶の薄かな

石田加津子

十五夜、十三夜の母の蒸し饅頭が懐かしい。

跳箱を一段上げて冬に入る

市川めぐみ

冬に向かう心構えを強く持ち準備する。

霧の間に望む雄姿や槍穂高

一ノ瀬茂代

山好きの夫婦の忘れられない景です。

ごきぶりをたたくルビーの指輪して

伊藤はる子

ごきぶりの黒色とルビーの朱色の取合わせ。

岩楯恵津子

雜踏へ流木となる九月尽

伊藤 道郎

季節の変わり目温もりを求めて雜踏へ。

岩楯恵津子

地震あり戦争もありもう野分

岩楯恵津子

ああ神様、人間が居る限り平和は来ないのか。

ポンポンと新茶詰めする座敷かな

岩本ひさみ

製茶農家は新茶を売物、贈答など袋詰めします。

初蝶や水新しき手水鉢

内田知江子

麗らかな春の到来を初蝶と水で吟じました。

ごみむしバツハごみむしバツハ夏近し

大石 和子

自由に書けてすごく気に入っている。

甲羅甲羅ミシシッピーミどり亀甲羅

大石 雄介

ことばは一本の花のようにただ立つていればいい。

芒野に三百六十度の孤独

大佐田うづき

自分の中の孤独から逃れられない思いを感じて。

寄り掛る樟の大樹や秋日和

大沢 年子

私が学んだ小学校にはいまでも樟の巨木が健在。

青饅や父に尋ねる醉の加減

大澤 紀子

父の好物を今年も作ることができた喜びを表現。

玉苗やさねさし相模雨の中

大島美恵子

原風景が突然十七文字となつた。

梅が香に誘ひさそはれ小半日

大塚 行人

梅どころ、富士山を望む豊かな自然に暮らす感謝。

秋暑し小銭すつきり使い切る

岡田 典代

小銭は重くて騒がしい。爽やかな秋へ。

陽炎や教室出される「はだしのゲン」 岡本 史郎
文化統制がヒロシマでも・・・ 残念無念の一匁。

寂しさの残る線香花火かな

尾崎 一夫

あの火玉を長持ちさせようと・・・ 残念無念の一匁。

やさしさをときどき忘れ草の花

小澤 純子

日々いつもやさしさを忘れずにいたらと。

青柿や少年という未成熟

青は未熟の意、青柿に青臭さを感じた。

小澤 園子

新盆や姉は七十九のまま

小野 菊土

三年の介護が思い出されます。

片野 花子

秋の夜に永久の調べやカンパネラ

香川 花子

フジコ・ヘミングの奏てる音を詠みました。

勝木 澄子

生まれ来る子にも乾杯梅の春

片野 節子

新しい命の幸せと無事を願いました。

大島 美恵子

梅雨長し人町老いて空のバス

勝木 澄子

少子化と高齢化の現代を愁いました。

大塚 行人

大雪山の噴煙摩くななかまど

加藤 幾代

だいせつ
大雪山のお花畑を歩き七竈の赤い実に和んだ。

加藤かほる

病む地球の季節を繋ぐ虫の声

加藤かほる

ようやく秋、虫の鳴く声に安堵する。

鮎を追ふ子らの頭上をB二十九

加藤 健治

八歳の時下校途中の小川で鮎を追いかけていた。

思い出を結ぶ風鈴百の声

加藤 富江

思い出は美しく素晴らしい！

究極の平和を探す秋の寺

加藤 春江

人間社会のどうにもならない事柄に思いを馳せて。

半生を寺に仕へて冬至粥

加藤まりこ

ふと振り返つて気付いた自分の人生。

竹馬を一段あげて別世界

門松 凤文

竹馬を一段あげると景色が新鮮に見えた思い出。

医の道や終点のなき春の道

神山つとむ

人びとに健康を送り明るく生きたい。

秋の月見れば見るほどうさぎ居そう

川上 靖子

故里に住んでいた頃の疑問。

風と樹がロックを踊る避暑地かな

川瀬 芳子

さわやかな風を感じたコンサートを思い出し。

座りっぱなしの青蛙の欠伸判るな

川合 昌子

卒寿越えはできただけど入院ぐらし、散歩に・・・。

臆たけし御感の藤へ風少し

川本 育子

かつて主催した「藤まつり」で詠んだ句です。

十葉が天使に見える母逝きて

河本 純子

母が他界して庭にある十葉が天使に見えた。

花筏添うて流るる影筏

神田 征夫

花筏の影が川底に映り流れる様に気づき詠んだ。

桜咲け癌サバイバーシン・英余

菅野 英余

放射線治療経過良好。再生する私。河津桜満開。

野良着にも母に映えある地図の汗

北村 文江

田草取の母は汗だらけ、働くことを惜します。

初午の夜は白狐の鳴くだろか

木村 幸枝

氏神様のご神体は白狐の毛、声を聞いてみたい。

身になじむ木綿の農良着秋涼し

久保寺トミ子

畑仕事に生きてきた半生、木綿の農良着は制服。

鼈鼠は疫病の空を辺りをる

小島ノブヨシ

滑空する鼈鼠を見たときの感動は忘れられない。

まあ野鳥ことわりもなくぶどうたべ

小瀬村信子

まあ野鳥ことわりもなくぶどうを食べていた。

白鷺や萩窪堰の梅雨晴れ間

小早川のぞみ

日隠しの竹垣をとうた萩窪堰に白鷺が餌を探していた。

鳥雲に未完のままの設計図

小林永以子

建築科の次男が交通事故で未完成の設計図人生も。

負けたつていい螢鳥賊発光す

小林 環

捕獲後一斉に発光する螢鳥賊に自分を重ね。

長恨歌書き継ぐ春の夕べかな

近藤 久江

白居易の玄宗皇帝と楊貴妃との悲しい恋物語。

クリップのとびつく磁石朝暉

西賀 久實

未曾有の暑さに生きる事と真摯に向きあつた今夏。

月光や駱駝は海の夢を見る

齊藤 桂

砂漠に眠る駱駝の夢は海を泳ぐ夢かもしだれない。

香煙の路地の行来や地蔵盆

齊藤しづか

童心に返り板橋のお地蔵さんに参る。

オーロラを抱きて眠る母の胸

佐々木重満

厳しく、短命だった母への憧憬。

ふるさとに盆歌のあり口遊む

佐宗 欣二

盆歌は西条八十作詞 中山晋平作曲の強羅音頭。

息白し工事現場の誘導員

佐藤 正子

厳寒の中高令の方が働いている。生活守るために…。

小気味よき牛車の音や賀茂祭

瀧谷 明子

御所からくり出す様は王朝絵巻を観ているよう。

春浅し米粒ほどの白き花

清水美代子

足元に小さな花をみつけて花の強さに感動した。

朝顔や企業戦士の靴の音

下平 美子

爽やかな朝、木に絡んだ朝顔と仕事に燃える人。

寒垢離に切れて飛び散る念珠かな

庄司 下載

切れ・飛び・散ると畳みかけてコマ送りで映像化。

百年の屋根葺き替えし雛の家

杉本 久子

瀬戸屋敷の雛祭。葺き替えた屋根に感動した。

黄砂降る視力検査のあてずっぽ

杉山あけみ

それでも結構当たつていたりして笑えます。

梅花藻や光の破片渦に乗せ

鈴木 陽子

川の煌めきと梅花藻の白さを表現したかつた。

魂は奈落に眠る去年今年

須田 聰子

思いがけず兜太選を頂いた、私の俳句の原点。

飼犬に「待て」を教へる日永かな

関戸 わよこ

一粒のおやつを必死に我慢する子犬に癒された。

十月尽言葉を入れ替へてみても言葉

瀬戸 正洋

言葉で感情意思等を伝えることはできない。

淋しき日健気に咲きし余花に会う

瀬戸とみ子

娘の病気に折れる心を余花が励ましてくれました。

春泥に歪む太陽修司の忌

瀬戸 悠

前衛芸術家として多方面に活躍の寺山への思慕。

七十年諸口にせず父逝けり

瀬戸 りん

「一生分食つた。」父の戦争がやつと終つた。

墓のこゑわが晩景を明るうす

芹澤 常子

グロテスクだが好きな墓とわが老境を取合せた。

田仕舞ひと決めて積み出す今年米

高井 幸子

米作りも今年で最後、ほっとしたが寂しさも。

一斉にポンプの唸り出初式

高杉掘三朗

一斉放水のポンプ車に着目して詠んだ。

神に榚仏に榚初明

高橋久美子

初明の取合わせにより常の景に異なる趣が出せた。

激動の語り部となり終戦日

高橋 小糸

青春時代、モンペ姿の防空頭巾で日々過ごした。

子と包むギョーザ大小ちちろ鳴く

高橋千代子

子と賑やかにギョーザを包む、形は悪くても旨い。

栗の実の爆ぜて見えたる本音かな

高橋みどり

毬に包まれし栗が爆せて顕に本音が表面化する。

二階まで畳の匂い冬銀河

竹下由里子

畳が入った夜、階段を上がりながら得た句。

チユーリップ小さな秘密抱へをり

武居裕美子

誰もが心に持つ煌々した想いを詠みました。

おびんずる撫でて息災初地蔵

田中 恵一

痛いところと同じところを撫でると治るという。

ちちははを語りつくして盆の月

田中 幸子

お盆。同胞集い父母へ感謝と想い出は尽きず。

ソプラノが降つて来そうな冬星座

田畠ヒロ子

冬星の光りから、ソプラノが聞こえそう。

イニシャルはE・T乱行して夏

佃 悅夫

地球外宇宙人として生まれついたか。

プレハブの校舎の三年卒業す

出澤 洋子

戦後のベビーブーム世代と被災した子等の今と。

稲穂波「喜びの歌」謳ふかに

富田 公子

風が強く稲穂が大きく波打つと歌が聞こえた。

ぶらんこの少年青い風に乗る

豊田 幸枝

少年が風に乗って未来を夢見ていく。

月光に五代の墓や老桜

鳥海 壮六

藤田湘子先生の眠る早雲寺に老桜が咲き盛る。

また一人星になりけり冬銀河

中田 笑子

もう会えぬ人が星の中から語りかけているよう。

語り部は記憶の伝承終戦日

中津川晴江

被災者が減り風化防止で語り継ぐ大切さを感じじ。

青空に束縛はなし夏の雲

中根登美子

自由に形を変える夏雲、大きな希望を見た。

見おろせば浅草観音片しぐれ
星 一義

スカイツリーからの眺望を詠んだ。

子供等が風になつたよ芒原

中村 昌男

芒原を吹く風が遊ぶ子供等を仲間にしてしまった。

褒められてそして寂しい覗採り

中山智津子

褒められた嬉しさと覗の哀れさ、少女期の葛藤。

雁の群れ発つ森々とあさぼらけ

中村 裕子

辞書に「森々」の言葉を発見、文字から連想した。

一寺だけ遍路と歩く伊予の道

のがわきいち

一度は歩き遍路をと、何時の日かほんものを。

ぱりぱりとタオルの乾く炎暑かな

畠 間みどり

初投句初入選の記念の句。身辺を素直に詠んだ。

かながはのかな..

神奈川の蜩中々泣かぬかな、自虐の一匁に認めた。

獵銃音近し日輪脈打てり

畠 梅乃

ヒヤシンス主なき部屋へ光置く

原 仁子

亡き子の部屋へ飾つた花に明るい子の姿を見た。

ささらぎの橋上をくる犬の脚

寶子山京子

かつて飼っていた犬の幻影だったのだろうか。

あの頃を誇る城址の松落葉

松下 俊之

小田原城本丸跡に残る七本松の雄姿を詠んだ。

セミしぐれ終わりのゼロが始まりか
生きしていくれるだけで感謝。今年の母の日に。

子の顔を忘れし母にカーネーション 肥後ちさこ

本多登美子

セミの声に終わりを感じ始まりを思う。

刺のある紫紺の茄子の曲線美

廣田 悅子

夫が丹精した朝採れ茄子の新鮮さが伝わればと。

たんぽぽの絮や飛び立つ軍用機

深澤 一華

厚木基地とその前の公園の対比を詠んだ。

桜舞う麻痺のある子の一歩かな

二上 光子

四六年前の脳性麻痺の教え子の一歩。今も鮮明。

ふるさとの夜をゆるりと踊りをり

二見 和江

子を胸にゆつたりと踊る美しい女性を見た。

落日のなほ力あり水を打つ

古屋 德男

明日登る力強い落日。私の活力もこうありたい。

短夜や恩師と友と旅にあり

松岡美和子

学生の頃の話が弾み時間が過ぎるのを忘れた。

11

襟ゆるくちんまり座せり生身魂 松良 繁美

姑と同年令になつたけどちんまりとはいかない。

オープンドード反り出して夏盛ん ミステウレッタ弘美

夏休みシーズン犬も車から身を反り出し満喫。

冬の薔薇碧空向い凜と咲く 峯尾ユキエ

初めての句。これから気持ちを込めた愛しい句。

ユーカリの幹に一本蟻の道 村場 十五

大小を取り合わせ眼前の景をシンプルに描写。

忘れてはならぬ日の来て秋の空 森田 久江

私が十才の時に終戦になる、毎年忘れる事はない。

故郷は小学校まで歩いて一時間の山里だった。 守屋 まち

読初や兄も話者なる民俗誌 安池 利枝

今朝の秋空の深さにははのかお

誕生日と命日が同じの母を思いだす。 柳川 紀枝

鰯雲あれが最後のふたりたび 柳澤ミサ子

夫は車椅子生活となり好きな旅行にも行けず……。

心と体折りあひつかず木の葉髪 柳澤ミサ子

しんたい 体調を崩した。兼題の季語がぴったりはまつた。

妣に今尋ねたきことさくらんぼ 山崎美知子

六月に毎年故郷のさくらんぼを送つてくれた母。

星月夜子の住む北を仰ぎけり 山田 照子

初めて娘を嫁がせて間もない頃。

虫時雨ラジオも消して灯も消して 山本 すみ

長い酷暑。忘れていた自然の夜を思い朝を待つ。

不二の影ありし日思ふ盆踊り 湯浅 義幸

盆踊のときの不二の姿が大きく思い出された。

魍魎の纏ふ夜更けの花吹雪 横塚 昌平

妖艶な桜吹雪の昼と夜との二面性を書きたく。

父と子の野鳥観察若葉風 吉田 百代

風香る頃の父と子の野鳥観察のほほえましさ。

人はみなよきものもちて草の花 吉田 康雄

人も草の花も夫々の環境で個性を發揮している。

良い嫁の定義などなし初茄子 米山 翠

初茄子のように不格好で味わい深い関係にしたい。

垣間見る文士の庭や夾竹桃 來田 京子

憧れの文士の庭には今年も夾竹桃が咲き誇っている。

風薰るはたりと動く牛の耳 若村 京子

牛にも風が気持ち良いのだろう、耳で喜んでいる。

花八ツ手寺に産着の干されおり 和田恵美子

ふと目に入った光景。いのちの繋がりを思った。

俳句おだわら (10・19〆切り、到着順)

ふるまひの少し姉ぶる鳳仙花

池田 忠山

◆こよろぎ (9・26)

つとむ報

◆小田原鹿火屋 (9・19)
かなかなかな雨粒落ちし夕梢
考妣の化身か我に寄る揚羽

久江報
足立 和子
川本 育子
高橋 小糸

せせらぎの石に音立て水の秋
絵の具溶く筆の先まで水澄めり
竹林の光綾なす風は秋

湯浅 義幸
近藤 久江

◆山北 (9・25)

由里子報
和田恵美子
星 一義

月見草駅は無人の灯がともる
朝冷や頭陀袋には心電計

石田加津子
竹下由里子

弟と投げ合うボール赤とんぼ
思案気に廻るや秋の扇風機

忠山報
肥後ちさこ
関戸わよこ

◆香雨・梅ごち (9・7)

木の葉髮椀にひとすじあららら
心と体折りあひつかず木の葉髮

ひと雨に秋めく風の生まれけり
岩鼻に釣人ひとり水の秋

門松 凤文
吉田 康雄
吉田 百代

一粒を吾子の頬張る黒葡萄

自転車のドミノ倒しに台風圈

うすれゆく故郷の記憶つくつくし
ビル街に残る仕舞屋カンナ咲く
つくばひの鏡のさまに秋の水

小澤 純子

梨を喰む子にたしかなるのどぼとけ
稻雀散ればほどなく通り雨
葡萄喰ふたび思ひ出す甲斐の山

大澤 紀子
高杉掘三朗
神山つとむ
幸子報

◆青梅 (10・1)

秋晴れの箱根連山一望す
味噌かへて秋風ぬける厨窓

久保寺トミ子
田中 幸子
加藤まり子

一望の稻田の風が身を包む
豊の秋采配ふるふ卒寿かな

久保寺トミ子
田中 幸子

◆沈丁 (10・2)

竇子山報

若村 京子
柳澤ミサ子

木の葉髮思へば遠くにきたもんだ
木の葉髮思へば遠くにきたもんだ
木の葉髮思へば遠くにきたもんだ
刈田道風の通りがほほをうつ

田中 恵一
河本 純子
勝木 澄子
菅野 英余

木の葉髮合せ鏡の夫婦かな
木の葉髮父も使つた文机

冷ややかや無言で済ますセルフレジ
木の葉髮風にふかれてはや卒寿

つけ櫛やはらはらさらり木の葉髮
清水美代子

片野 節子
峯尾ユキエ

露冴ゆる爛を待つ手に砂時計

せんのない思ひ綴れり木の葉髪

長寿とや笑ふて泣いて木の葉髪

米高値異常気象に木の葉髪

人恋し手櫛に絡む木の葉髪

千切れ雲顧みるなし木の葉髪

木の葉髪鉄の女といはれても

◆春野（9・21）

公園の蛇口はづされ夏終る

秋の雲一瞬よぎる帰心かな

近道も回り道にも曼珠沙華

銀河の尾とどく中央分離帶

お持たせのどれも柔らか敬老日

要精検要精検とつくつくし

松園に序の舞ありし菊香る

ミステウレッタ弘美
天高し「絵の具の青は品切れです」長谷川きよ志

◆みなみ（9・13）

秋風や影やわらかな石畠

網を持て子等の追行く銀やんま

稻雀投網うつごと田へ降りぬ

鳳仙花妻の座にいて六十年

松下 俊之

武居裕美子

森田 久江

川瀬 芳子

鈴木 陽子

神田 征夫

寶子山京子

きよ志報

伊藤はる子

内田知江子

尾崎 一夫

瀬戸 悠

富田 公子

二見 和江

内田知江子

尾崎 一夫

かほる報

市川めぐみ

川上 靖子

加藤 健治

豊田 幸枝

カンナ道曲がれば寺に行き当り

草千里ぐいと秋へ曲がりけり

コスモスは風と語りて踊りたる

掛け鏡少しの塵も良夜かな

群とんぼ我の背ナにも翅の欲し

◆実のり（10・15）

たか志報

荒井ちゑ子

岩本ひさみ

杉本 久子

木村 幸枝

新井たか志

十五報

青木 孝子

池田 令子

西賀 久實

佐宗 欣二

中田 笑子

山崎美知子

石川 州洋

瀬戸 下載

柳川 紀枝

加藤 富江

小瀬村信子

齊藤 静

加藤かほる

霜降や真つ赤な帯の新刊書

押明けの沖の紅鳥渡る

フランゴ一本足に秋の水

去来忌や夕下風の木賊叢

孟蘭盆や始発乗り継ぎ一番機

引き出しに白き念珠や涼新た

蛇穴に入るや一条戻り橋

刺継のジーパン軽し秋日和

コスモスや無人駅舎の精算機

ふりむけばマネキン案山子田の夕べ

富士を背に坂道行くや女郎花

ひとりごちひとりで嗤ふ夜長かな

稻刈を終えて氣儘な風が吹く

老ふたり歌ふフォークや月今宵

木製の新のベンチや曼珠沙華

白湯飲みて新の靴下暮の秋

妻の字の名入りのタオル天高し

鈴虫や灯をちこち夕餉どき

漢詩一行覚え難しや二十日月

あてどなく百均へ行く暮秋かな

◆零
(10・16)

高橋久美子

中山智津子

齊藤 桂

芹澤 常子

深澤 一華

松岡美和子

大島美恵子

加藤 幾代

高橋 千代子

米山 翠

來田 新子

青山 典仁

大沢 年子

小林 環

瀧谷 環

下平 美子

鳥海 壮六

古屋 德男

守屋 まち

十五 村場

天高し高しと腰を庇いつつ
新涼は極上の絹よく眠る

秋風や値上げの仕打ち闊歩する

新米を磨ぐ手の平のうれしさよ

叔母102歳間に合わなかつた新米

満月や物言わぬ海漁船帰る

いじめ癖遺伝ですか數枯らし

◆草むら (10・18)

行く秋や水の音消えし水無川

賜のこゑ大黒柱さらに黒

どぶろくや孤独の輪郭ぼやけ出す

大海原ときを忘れる秋十月

一望の海穏やかや天高し

閑かさや神社の森に秋の声

国府津浜海輝いて秋の風

なつかしいことばと出会う秋の古社

波音の規則正しく秋の風

撫で牛や耳なし目なし天神社

秋うらら社の大樹魅了せり

青木たけを

伊藤 道郎

佐藤 正子

中村 裕子

本多登美子

岡本 史郎

佐々木重満

石井 秀稀

佃 悅夫

原 仁子

中村 昌男

中津川晴江

原 松良

仁子 榮美

安池 利枝

二上 光子

昌平

顛末を語る流木秋の浜

椋の実の落ちて鎮守の通りやんせ

◆無所属

遠目には彩り淡し草の花

底紅やきのふの吾より荷の届く

秋刀魚食ぶ中骨一本残る皿

秋麗ら稽古三味線三下り

秋を買う小ぶりなれども初さんま

夕闇の鉦叩短かき一會

十月の吹奏楽部員はバスに乗る

風の盆指が宇宙と対話せり

山門にかるく会釣の秋彼岸

重さうに軽さうに来る神輿かな

零余子を引く鳥のくちばし引くよう

ヨーソロー牛蒡てんぶら筏組む

身の内の野分しずめて寝酒かな

「身を守る行動とつて」秋出水

逆らわづ仏のごとくゐて涼し

こげ飯にしようゆ少々秋日和

台風の来るらしどアノブに微熱

棟梁の煙管銜へし老の伊達

小野 菊土
石井きよ子

小島ノブヨシ

小林永以子
畠 梅乃

一ノ瀬茂代
山本 すみ

岩橋恵津子
出澤 洋子

瀬戸 正洋
田畠ヒロ子

山田 照子
須田 聰子

大石 雄介
大佐田 うづき

北村 文江
岡田 典代

小澤 園子
杉崎 せつ

「わたしの一旬」編集後記

七百号特別企画「わたしの一旬」に投句をいただきました。作者それぞれの思いのつまつた句と自解でした。紙面の都合上自解の字数を趣旨変らない範囲で手を入れましたこと、何卒ご諒解下さい。

広報部長 村場 十五

令和七年年間ベスト一句集案内

一、全会員に、令和7年中の作品からベスト一句を自選していただきます。協会報発表句には限らず各人の全発表作品を対象として下さい。

一、各グループごとにとりまとめて下さい。グループの責任者には別途そのお願いをさし上げます。
一、無所属の方は、広報部あて「ベスト一句集」としてはがきで送稿して下さい。

一、〆切り 令和8年1月9日（2月号掲載）
一、送稿先 〒250-0042 小田原市荻窪五四九一七

小田原俳句協会広報部 村場十五

杉山あけみ

柏手の音の行方や初山河

山崎 悅子

柏手は神社で、初山河とありますのでこれは初詣ですね。家族や知人の健康や幸せ、無事を願つての柏手と思いますのに、その音の響きから遠くの景色にまで視野が広がった所に感動しました。この美しい自然がいつまでも続きますよう祈らずにはいられません。

日本の四季から春と秋がなくなつてしまいそうな昨今この異常気象の中、どうぞうぞおだいじに、くれぐれもご自愛下さいますように!!

青蛙跳んでは児らを遊ばせる

蓑宮 わか

夜半の冬三半規管ざわざわと

峯尾 ユキエ

鯛焼の温し月蝕さなかなり

村場 十五

かみ合はぬ家族の記憶とろろ汁

百川 秀子

冴ゆる夜の鏡に吸ひ込まれてゆく

守屋 まち

音を連れどこへ吊るそう軒風鈴

安池 利枝

夕暮れて落ち葉の音を足で聞く

柳川 紀枝

わけもなく白木蓮の白ねたむ

柳澤ミサ子

てらてらと石州瓦山眠る

山崎 美知子

十二月八日深夜便のジョン・レノン

山田 照子

少年の今日も無口やかいつぶり

山本 すみ

中田 笑子

草流れ軽鳶の子流れ川流れ

守屋 まち

季語軽鳶の子で季節は夏。まだ飛べないカルガモの雛が親の後を追つてヨチヨチ歩いたり泳いだりする姿はなんとも微笑ましい。小川が穏やかに流れ、草も軽鳶の子も流れていく。軽鳶の子は水面下で一生懸命に泳いでいるのだが、ぎこちない泳ぎでまるで流れているように見えるのだ。流れという語のリフレインが句をリズミカルにしている。

絵本の一場面のような情景で、心の和む一句。

赤ちゃんの体温もらう寒さかな

蓑宮 わか

梅の香や胸の破片は抜けぬまま

峯尾 ユキエ

ふるさとに宿をとりたり冷し酒

村場 十五

向日葵や戦禍に知りし街いくつ

百川 秀子

生身魂香りあふれてレモンサワー

安池 利枝

レジ並ぶ男の籠にカーネーション

柳川 紀枝

わけもなく白木蓮の白ねたむ

柳澤ミサ子

子のこころ読めぬ不覚や寒茜

山崎 悅子

背を向けて文よむ少女春の風

山崎 美知子

癒ゆること信じ葛湯の半透明

山田 照子

少年の今日も無口やかいつぶり

山本 すみ

第62回小田原梅まつり俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「梅」(春に限る)「長閑」(いすれも傍題可)

各一句一組 未発表作品に限る

締切 令和七年十二月三日(水)必着

整理費 一組につき千円(何組でも可)

投句先 〒250・0851 小田原市曾比二四三三一

米山 翠 ☎〇四六五—三六一四五九〇

*作品は原稿どおり印刷します。

選者 協会役員及び各地区有力作家(投句者に限る)
賞 県知事賞以下二十位まで 選者特選賞六人

第二部 俳句大会

日時 令和八年二月八日(日)

会場 おだわら市民交流センター(UMECO)

受付 十一時 投句締切・十二時 開会・十二時半

整理費 千円(呈飲料・菓子)

席題 春季雑詠一句と席題当日発表一句 総互選

賞 受付 市長賞以下五十位まで(結社賞含む) 参加賞
(主催) 小田原市観光協会 (主管) 小田原俳句協会

(後援) 各地区俳句協会

*各グループは当日前までに結社賞をご用意下さい。

*会場は飲食可能です。感染症防止対策にご協力ください。

第15回おおいゆめの里俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「卒業」「初蝶」(いすれも傍題可)

各一句一組 未発表作品に限る

締切 令和八年一月九日(金)必着

整理費 一組につき千円(何組でも可)

投句先 〒258・0019 足柄上郡大井町金子一一四一

小野菊土 ☎〇四六五(八三)〇八八〇

*作品は原稿どおり印刷します。

選者 俳句協会役員及び各地有力作家(投句者に限る)
賞 町長賞以下十五位まで

第二部 俳句大会

日時 令和八年三月十四日(土)

会場 町立そつわ会館(大井町山田五〇二)駐車場完備

受付 ☎〇四六五(八五)一六〇一
送迎バス小田急線新松田駅九時三〇分

整理費 十時 投句締切・十一時三〇分 開会・十二時

席題 五百円(飲み物呈)※昼食は各自ご持参下さい
春季雑詠一句と当日発表席題一句 相互選

賞 受付 三十位まで
(主催) おほゐ俳句会

(後援) 大井町 大井町教育委員会 大井町文化団体

連絡協議会 神奈川県俳句連盟 小田原俳句
協会 各地俳句協会